

**一噌流初期三代(中村七郎左衛門・又三郎・噌庵) :
付載『笛伝来中村家書留抜書』**

| | |
|-----|---|
| 著者 | 三宅 晶子 |
| 雑誌名 | 能楽研究 : 能楽研究所紀要 |
| 巻 | 9 |
| ページ | 181-195 |
| 発行年 | 1984-03-31 |
| URL | http://hdl.handle.net/10114/00020343 |

一 噌流初期三代(中村七郎左衛門・又三郎・噌庵)

付載 『笛伝来中村家書留抜書』

三宅 晶子

一噌流は、その名前のもととなった一噌似斎(中村又三郎。以下似斎と称する)より数えて三代目の八郎右衛門代に宝生流の座付となる。それ以後の固定期に対して初期の三人の時代が、その後の一噌流の芸の土台となったものと考えられる。七郎左衛門は、千野与一左衛門と並んで桧垣本彦四郎栄次(笛彦兵衛)の弟子であり、彦兵衛より多くの伝書を相伝されている。一噌系伝書は多くそれをもとに成ったと考えられる。現存する笛伝書は、七郎左衛門から似斎を経た一噌系と、千野与一左衛門から牛尾玄笛を経た千野系の二種に大別されるが、本稿では、笛伝書全体の研究の一環として、一噌流の初期三代について考察したい。

『近代四座役者目録』(以下『近』と略称)には、素人役者の項に、中村又三郎とその後継者噌庵があげられており、七郎左衛門は又三郎の項で言及されている。まず、三人に関する『近』の記事を、編者自筆本を使って紹介したい。但し、中村又三郎の項は記述が長大なので、冒頭のみ原文のまま、七郎左衛門に関する部分をAとし、以下B～Hとして似斎について内容ごとに略述した。なお

噌庵については原文のまま引用してある。

中村又三郎 後一噌似斎ト云。近江、備中屋七郎左衛門が子也。

A 七郎左衛門ハ彦兵衛弟子也。ヨク笛ノ事ヲ習。ブヒヤウシニアリタルト也。千野ト相弟子也。

B 似斎は親に十五・六歳で死別し、幼少の頃は比叡山で童子をしていた。

C 笛は上手で、父が残した聞書を参考に独学した。

D 近江で道智・道意の鼓で平調返を吹いた時、おろし所がくい違ったが、禁裏での時に宗掇が昔通りの奏法だと保証した。

E 弟子には音色・音取りを専ら教えたので、皆音取りはよかったが、拍子合は下手だった。自身は音もよく調子も心得た吹き手であり、豊勝は十三歳まで相手をした。毎日風呂に入った。

F 威徳四郎次郎が千野に、一度相手をかわれと言ってくれて

機会を与えられ、認められた。

G 年齢は宗擧と同年、慶長五年没。七十六歳。

H 玄笛より上手。豊後に十年程住む。(以下略す)

中村噌庵 一噌ノ甥孫也。笛ヨク習。一噌果テ、書物不残ト
ル。事外ビヒヤウシニテ、序ノ舞モアワズ、ハヤシモシカ
ク吹ズ。音取ハヨク吹。笛ノ音ハ一噌以来ノヨキ音ヲ吹
也。

一 中村七郎左衛門

天文八年(一五三九)か九年没(B・Gより)。息子の似斎が十五・六の時であるから、三十代後半から四十代前半であったと考えて、明応から永正初めあたりに生まれたのではなからうか。

備中屋中村七郎左衛門尉長親(花押)

天文六年丁酉二月十六日之書立訖

資料A

右は早稲田大学演劇博物館安田文庫蔵『能舞笛秘伝書』(この書名は後に付けられたものである。表紙中央に『金瑠落梅書』と記されているが、これも表紙の絵に基づく呼称のようで、本来の名称は不明。同じ書が東北大学図書館狩野文庫に『笛の記』として収められている。両書をさす名称として『金瑠落梅書』を用いる)の奥書である。これにより七郎左衛門の本名が長親であったことが判明する。

『享保六年書上』には、次のように記されている。

彦兵衛実子御座候得ども、芸不堪ニ付、私先祖七郎左衛門へ
笛一式伝授仕、天文五閏十月十九日ニ家伝書并相伝り候笛、
不残附属仕候。右相伝之通、子孫江伝授仕候。 資料イ

天文五年(一五三六)、つまり死ぬ三・四年前に笛と伝書を彦兵衛から伝えられたという内容である。この記述は、次のような伝書の存在が想定されることから考えて、正しいものと考えられる。資料Aの『金瑠落梅書』は、二百五十余条の諸説からなり、いくつかの伝書の集成のようであるが、その第一番めのまとまり(第30条)の部分に、次のような識語が見られる。

右笛書条々うつしたまはるといへ共、此十駄の心音曲にかき
らす、乱舞の上に雖通、別而ハ笛の心得肝要候よし、日吉左
衛門尉之国伝よし、笛彦兵衛尉栄次此ことはりを伝間、如此
しるしおく者(也カ)此一札ハ天文五年閏拾月十九日うつしたまは
る。／同在判有之

『享保六年書上』にある相伝の日付けと一致することに注目したい。『金瑠落梅書』には、他の部分にも山野井安芸守から日吉左衛門が伝えられたものを彦兵衛が相伝されたとの識語を持つ説が含まれており、又全体が笛の故実や基本的な古説を中心に編まれており、彦兵衛から相伝されたものの集大成的書物ではなからうか。天文五年の日付けは、『享保六年書上』提出時に、芸祖伝来の根本伝書の一つであったろう右30か条分で完結する伝書の奥書の日付けを見て、書き加えたものであろう。書上提出の際も同にしたと考えられる『笛伝来中村家書留抜書』(安田文庫蔵、後述)には、資料イの記述のみが欠落している。このことから考えても、イは本来あった家説ではなく、書上作成時に加えた説であると見たい。しかし、鴻山文庫蔵『遊舞集』『笛秘書集』、安田文庫蔵『笛集』等の遊舞集系伝書には、千野与一左衛門・七郎左衛門・与左衛門国広に相伝された書物を一書に合写した由を示す識語が

ある。さらに『遊舞集』『笛秘伝書』には、似斎と千野がそれぞれ彦兵衛から相伝された秘伝を成田吹介に与えたことと、それを国広が証明する識語を有する。これらは、資料イを裏付ける一つとなるであろう。又狩野文庫蔵『笛の書』（『矢野一字聞書』中「青書相撰」に同じ）は、やはり古説の集成であるが、そこには「中村七郎左衛門／松吉与太郎／増田左近」の署名がある。以上のような伝書の内容やその識語から、資料イの如く、七郎左衛門が彦兵衛より多くの伝書を相伝されていたことは、事実であると考えられる。

七郎左衛門は、『近』によると、笛はあまり上手ではなかったらしいが、『矢野一字聞書』における次のような七郎左衛門の位置は、『近』と呼応しており、興味深い。

一、音取ノ小手六下。兵衛殿遊候ハ、梅ノ花朽木一リンアルヲ、ヲリタルコトク遊候。小七郎左衛門モ今ヨリハ如此コヒサセテ吹レ候ヘト、兵衛殿被申候ヘ共、小七郎左衛門存分ハ、兵衛とのハ手カレタル上ナル間尤候、…… (5)

一、チノハ、彦兵衛とのモ七郎左衛門とのも御キライ候イキ枕ナト、スキテ吹レ候由候。…… (79)

一、乱ヲ乱ニテ留ト云事有由、去方申候。尋処ニ、一円無之由候。小七郎左衛門とのハ、乱ハ乱ニ舞ヨリ吹、舞ニ又後ヲナシテ吹留ルト被仰候。…… (250)

（『中世文学資料と論考』の本文使用）

『矢野一字聞書』には七か所に七郎左衛門（小七郎左衛門も同一人物）の名が見える。250条は七郎左衛門の吹様を記録したもので、この種のものが他に二か条（73・259）ある。73条は座敷で小高音を

好んだという純粹に七郎左衛門の好みについてであるが、250条も、七郎左衛門を通して見た、伝統的・正統的な説についての記事である。そして5条は彦兵衛（兵衛殿）から音取の吹様の心得を説かれている内容であり、79条は千野との芸風の違いを示す。5条と同様彦兵衛の教えを記したものが二条（78・314）ある。つまり『矢野一字聞書』における七郎左衛門の位置付け方は、彼自身の芸風や卓拔さを尊重したものではなく、彦兵衛直系の弟子として重んじているにすぎない。『近』では似斎について「親ニナラヌ事ハ、ヲヤ笛ヲフエテ故、事外キ、書具ニ書置ヲミテ……」（C）とあって、七郎左衛門は聞書を残したことだけの価値しか与えられていないことと、一致するのである。

『実隆公記』大永六年（一五三六）十一月二十七日の条に

大山年貢八貫百文到来。備中屋中村七郎三郎伝之。

とある。年代から言って七郎左衛門である可能性が強い。大山は播磨の国大山郷であり、その年貢を七郎三郎が取り次いで運搬したものであろう。鴻山文庫蔵『笛の事』の帙には江島伊兵衛氏による書入れがあり、そこに「矢野新五郎ハ大永六年備中屋中村七三郎記ス凡笛聞書ヲ、天正十一年ニ中村一噌ヲ経テ相伝受ク」と記す。この『凡笛聞書』は現在所在不明だが、大正三年東京音楽学校『能楽図書陳列目録』49頁の紹介に「大永六年・中村七郎三郎長親（奥書）」とあり、これも右と同人であろう。七郎左衛門は大永頃七郎三郎と名乗っていたと考えるのが妥当であろう。

七郎左衛門の一噌流内での評価は、彦兵衛の芸を似斎に伝達する仲介者としてであり、伝書を多く残した功績によるものであって、芸についてはまったく認められていないのである。

二 中村又三郎(一噌似斎)

大永五年(二五五)生まれ、慶長五年(二六〇)没である(Gによる)。似斎が記録にあらわれるのは、茶会記がはじめである。

天正九年六月十二日朝 羽柴藤吉郎殿御会

播州ヒメチにて 宗及・備中屋一噌 (宗及他會記)

天正九年十月二十四日朝 備中屋一噌備之上手 (宗及自會記)

天正九年十一月十日昼 丹州にて能アリ。十老番。

備中屋一噌笛ヲ吹候。 (宗及他會記)

(以上『天王寺屋會記』『茶道古典全集』)
この他『宗湛日記』天正十五年(二五六)二月五日の条には、上京で一噌主催の茶会が開かれている由が記されている。右の諸記事より、一噌が茶人としても活動し、そこで笛の上手として知られていたことがわかる。秀吉の茶会にも出席しているが、似斎は秀吉から笛二管と山城の所領三百石を拝領する(享保六年書上他)等の保護を受けている。そして天正十年頃からは諸書に似斎の名が散見するようになる。

。天正十年九月十一日 下間少進のいる紀州鷲森本願寺での能に金春・春日大夫や山崎衆・京衆等と共に出席 (天正記)
。天正十三年十月二十日 三好中納言秀次卿にて小早川隆景・吉川元長饗応の能。高砂・湯谷・老松を吹く。

(『日本随筆大成』三期第一巻所収『筆のすざび』88頁所引)
。天正十八年九月十八日 毛利亭にて呉服。(毛利亭御成記)
。天正十八年九月十九日 聚楽にて前日の返礼能。定家・熊野。
。天正二十年四月十五日 関白秀次様前田民部卿法印江御成の

能。井筒平調返有・道成寺・二人静を吹く。

(『天正慶長年間御能組』観世宗家蔵) 資料ウ

。文禄元年四月十五日 関白殿玄以法印へ御成の能。井筒段序。
。文禄元年四月十七日 聚楽関白様山里にての能。井筒(段序を関白に伝授)。(この二か条『能之留帳』)

。文禄二年十月六日 禁裏にての能。遊行柳。(『文禄

二年癸十月五日於禁裏御能組』書陵部蔵。諸書に記される)

。慶長四年四月二十七日 尾張内大臣信雄公常真様にての能。

清経・千寿。(『天正慶長年間御能組』) 資料エ

。慶長四年十月一日〜四日 聚楽跡での観世身愛・初千世丸父

子勸進能初日。自然居士 笛 音千世丸

(『古之勸進能之事之覚』観世新九郎家蔵) 資料オ

秀吉・秀次をはじめ、前田玄以や織田信雄・細川幽斎・下間少進等、当時一流の能好きの催しに参加しており、五十代後半から晩年まで、第一線で活躍をつづけていたことがわかる。

特に幽斎とは関係深く、『戴恩記』によると晩年は近習的立場にいたものと考えられる。幽斎からの聞書である『耳底記』には、似斎没年の慶長五年(二六〇)五月四日に、幽斎の隠居所、京都吉田にて西王母を合奏している記事がある。翌日には幽斎が後援していた小笛という笛吹きへの稽古の心得について語っている。小笛については同四年二月十五日、伏見においての稽古の様子も記されている。又幽斎が似斎や甥の矢野新五郎へ宛てた、小笛の稽古をたのむ書状が存在し(鴻山文庫・永青文庫)、幽斎の小笛に対する力の入れ方は、並々ならぬものであったらしい。又資料オの音千世丸は、小笛の幼名であり、一時中村又三郎を名乗った時期も

あったらしい。似斎も幽齋に動かされ、名前を譲ったものであろう（能楽研究八号所収『丹後細川能番組』の解説の中の「乙千代」・「小笛」の項参照）。演劇博物館蔵『一噌流笛秘伝書』には、丹後にて幽齋に物語ったという記事が所収されているが、『能口伝之聞書』には、「慶長二年十月二十日於丹後田辺備中屋一噌物語」として、幽齋との談話を中心に二十四か条の芸談が収められている。幽齋に従って居城のある田辺まで下っているのであり、その時の演能記録も存在する（『丹後細川能番組』慶長二年十月十九日）。しかし慶長二年十月の田辺訪問以外の記録は未見である。

又、『近』には「一噌豊後二十年バカリ居」とあり（H）、『猿楽伝記』や『老人雑話』は豊後の者とする。

以上の如く、七十代における活動が目覚ましい。『一噌流笛秘伝書』には、没年の慶長五年十月十四日の日付けを持つ「かんノかゝりノ吹様」の唱歌付けが記されており、資料の性格から考えて、似斎の奏法の記録である可能性が高い。とすれば慶長五年も末に没したことになり、又最晩年まで現役で活躍していたことになる。

『近』は似斎没後四十七年を経て記されたものだが、観世元信が父又次郎重次・兄新九郎豊勝の直談をもとに書いたものである。兄は十三歳まで似斎の相手をしており（E）、又次郎は似斎より二十四歳年下の同時代人で、何度も共演した（資料ウ・エ等）近い間柄である。『近』の似斎の項はかなり正確だと考えてよからう。以下ではそれを確認しつつ、似斎の芸風と立場について考えたい。

Dにある平調返については『少進聞書』に次のようにある。

一、平調反ノ足ノヲロシ所、スミノ拍子ノマへ、序過テ、一

ダン序ノ足フムヨシ。道知又云、序過テハ序ノ足フマズ、常ノ如ナル可然也トゾ。炭蓮申候ト、一噌トハ同前也。大蔵道知ト相違也。両説尤有之。

観世方の宗掇が正統と認めた似斎の奏法は、金春方の炭蓮のやり方と一致する訳である。平調返にも様々なやり方が生じ、伝統的な方法が不明になりつつあった時代なのであろう。資料ウは井筒で平調返を吹いた記録だが、『元亀慶長能見聞』にはこの時行われた能についての詳細な記録がある。似斎時代以前には江口の習い事として存在した平調返は、『笛根元の書』（由良家蔵）に「近年ハ野々宮・井筒などにも平調返吹也。それハ所望次第也」とある如く、吹く範囲が拡大されつつあった。安照時代には「何も大事の能にふむ序也」（金春安照伝書）と、一応序の舞物であればどの能にも可能であるとの見解ができた。資料ウはその過渡期の現象の一つであり、秀次の所望によって似斎が特別に吹いたのであろう。『笛根元の書』の言う井筒は、ウの日の特例がきっかけの言及である可能性もある。ところで似斎は、様々に奏法の変化していく中で正統性の保証を与えるべき中心的人物であつたらしい。先にあげた平調返の記事からもそれがうかがえるが、下間少進関係の伝書等には、そのような立場にいたことを裏付けるような記述が見える。

似斎の笛の第一の特色は、その音色の美しさにあつたのではなからうか。『近』のA・B及び噌庵の項の記述は、一噌初期三代は伝統的に拍子よりは音色で聞かせる方を得手とし、尊重していたことを想像させる。『近』での牛尾玄笛は、弟子に舞ばかり教えるので音取りが下手だとされているが、Eはそれと対照的でお

もしろい。ここから牛尾はより拍子合が得意であり、似斎はより音色が勝っていたと短絡的に考えることは危険であるが、弟子の稽古の仕方が拍子中心と音色・音取り中心という相違が、両方の芸風の違いをどのくらい象徴しているか、伝書間の相違と関係あるか等、今後の検討の課題の一つとしたい。『近』の伊藤安中の項には、「一噌が存命中は名声を得ることは不可能なので少し異風をねらう」とある。又幽斎は玄笛に名前を付けてやる程かわいがっていたらしいが、諸書に残る幽斎の態度からして、似斎を名人として尊重していたにちがいない。鴻山文庫蔵『笛の事』(前出)は、噌庵の書き記した聞書集で、『八帖花伝書』にはそれと同一内容の記事が多く収められているが、『笛の事』には他に似斎の談話や逸話も多数含まれている。ある条では「似斎が吹く時は相手の芸が脇になる。京わらべ達は日本諸芸者すべてに対しても似斎一人がおもしろいと言っている。かまえの見事さ、くせない強い吹様、甲由田申の達人」等々とあげて、たたえている。自家の祖について語るのであるからさし引いて考えるべきだが、『醒睡笑』にも名人としての逸話が見え(『日本随筆大成』³²⁵頁)、多くの資料を合わせて考えると、まったくの虚飾とは思えない。

このような名声を得た似斎は、伝統的な奏法を継承する一方で、続々と新しい吹様を試みていた人であると考えられる。

一、盤渉ノかくハ、段ハ昔より定タルハ二段也。近来、一噌七段ニ御クサリにて候。⁽¹⁹⁰⁾

一、昔ヨリカイタウクタリハ、尺八ハ双調ト也。……昔ヨリ、笛ニテ五調子ニテ吹タルハナキ由候。一噌ハ五調子ニテ遊候。⁽³⁶⁵⁾

一、老松ノカ、リ。一噌、チカ与五太コノ時、ヒツホウタララウ、ト遊候へハ、与五ノ、仰天仕候由候。……⁽³⁸⁵⁾

似斎からの聞書を中心に編まれた『矢野一字聞書』は、右の三条をはじめ、似斎が新しく試みた奏法を多数含んでいる。又『一噌流笛秘伝書』には、鈴の段の吹き様について、一噌の吹き出した手が記されている。形式が固定化しつつあると同時に、まだまだ流動的な面も多く、役者の裁量で千差万別の演奏が可能な時代であった。その中で似斎は新しい工夫に努め、一噌子方の役割に留まらず、笛そのもののおもしろさを開拓した人なのであろう。一噌流の奏法の多くは、この時代にあみだされ、継承されていたものと考えられる。

似斎は遊舞集系伝書をはじめ、由良家蔵の『双笛集』も伝授している。これら、故実中心で千野・一噌両系統に伝わる伝書に対して、似斎の直談を中心とする聞書集の類が、一噌系伝書の特色である。「面・裏十二の書」として総合的、体系的に編集された感のある由良家の千野流伝書との大きな相違点である。

天正二十年正月二十六日夜、もり殿にテ御謡御座候時、五郎次郎一てうツ、ミにて、一噌笛御吹候。脇うたいニ野々宮御座候。謡ノ内ヲ平調にテあしらい、……後舞さうてう。^(マ)

文六五年五月二十六日昼、ふしみにてツクシノゆラと申人二人仰候て、一噌相尋置候。これニかきりゆりヲ吹ヌ大事也。口伝有。……(きよつねの吹様ノ事の条の一部)

右は『一噌流笛秘伝書』からの抜粋である。この伝書は似斎からの聞書を中心とした詳細な笛の吹き様の心得の記録であり、他に一字・宗節・やすき・宮増弥左衛門等の説が含まれている。文禄

五年(二五〇)の方は、似斎が由良瀬兵衛の清経の吹き方を学んで、自流に応用したという記事であるらしい。由良家には似斎の署名を転写する『双笛集』も伝存する。両者に芸の交流があったらしいことが想像できよう。この『一噌流笛秘伝書』と同様に、『矢野一字聞書』や『笛の事』も、似斎からの聞書集であり、甥の一字や、その実子噌庵が筆録したものである。又安田文庫蔵『笛伝書拔書』には、新兵衛・噌庵の談話も見られる。一噌系伝書は、七郎左衛門が相伝された古説と、新たに出現した似斎という名人の芸談を直接集録するという二様相を持っていることになる。それはとりもなおさず似斎の果たした役割そのものでもある。伝統の尊重と新しい魅力的な奏法の開拓、似斎のその二面性が、そのまま伝書にも表われている訳である。似斎の後継者達は(特に噌庵とその父一字の功績だが)、それを後世に伝える為に、故実書と聞書集という形で区別して残し、それが伝統となって継承されていったところに、一噌系伝書の大きな特色がある。

三 中村噌庵

『享保六年書上』で似斎の次に位置する、甥の矢野新五郎については『近』では別項を立てず、成田吹介の項で「噌庵親ナリ」と言及するにすぎない。矢野新五郎は、天正十八年(二五〇)九月十九日の能に出演しており(毛利亭御成記に「矢野」として登場)、幽斎からの書状も残っている(前述)。『矢野一字聞書』を記し、『一噌流笛秘伝書』にも談話が残されている矢野新五郎を、なぜ『近』がはずしたか不明だが、似斎所持の書物を相伝したのは噌

庵であり(近)、あるいは目立った活動もできぬままに似斎生前に没したのかもしれない。『丹後細川能番組』の慶長二年(二五七)十月・十二月の条には「新五郎」という名前が記されている。これが矢野新五郎であるならば(同書解説「新五郎」の項)似斎晩年まで生存していたことになるが、実子の噌庵も新五郎を名乗っていたので、これは、噌庵である可能性も考えられよう。系図等も二代目を噌庵としており、伝書の相伝者すなわち相続者という認識だったのであろう。

噌庵はその矢野新五郎の実子である。『笛伝来中村家書留拔書』(後述)の由緒書の項によると、寛永十五年(二三八)没である。そして『梅津政景日記』寛永七年九月二十日の条には、次のように見えている。

一、笛ふき宗庵所へ御小袖式つ被下候。御使駒木根五郎右衛門。同新五郎所へも御小袖仁つ被下候。

噌庵は似斎のようなめざましい活躍は見受けられないが、前述の如く似斎の芸と伝書を伝えているという点で重要な人物であろう。『金瑠落梅書』の狩野文庫蔵本の奥書には「備中屋中村噌庵(花押)」がさらに書き加えられており、一噌流の根本伝書を書写していたことが明らかである。又似斎の雑談を多く含む『笛の事』には、次のような奥書がある。

右噌庵公御書置被成候下書也／寛永拾三年^ね／五月二十

五日 中村七郎左衛門 幸恕／正保三年三月二十四日書之
寛永拾三年(二三八)は噌庵の死ぬ二年前の年記である。書写している中村七郎左衛門は噌庵の孫に当たる、一噌六郎左衛門(法名一遊、後述)であり、『笛伝書拔書』もこの人から中村五郎三郎にあ

てたものである。『笛伝書拔書』には、前述のように増庵の談話も記されている。

ところで、『享保六年書上』によると、増庵は死ぬ数年前に所領を没収され、失意のまま病死したらしい。息子の八郎右衛門の代に再び扶持を得るが、その間の事情を示す資料として、安田文庫蔵『笛伝来中村家書留拔書』がある。即ち「転切支丹」の項(二九三頁)にあるように、増庵の妻妙安と次男新五郎が切支丹の疑いをかけられているのである。妙安はそれを認めて転向したらしいが、新五郎は取調べ中に病死している。慶安二年(一六五五)に七十七歳で死亡したと書かれているが、これでは母の妙安よりはるかに年長ということになってしまう。年齢を誤写しているようである。また次男と記されているが、同書の「由緒書」は、増具を惣領、八郎右衛門を次男と記しており、増具の没年を慶安二年としている。つまり「由緒書」にある増具が「転切支丹」の笛吹新五郎に相当する訳である。増具は切支丹の疑いのため廃嫡され、次男の八郎右衛門が相続したに相違あるまい。「転切支丹」の方の誤写であろう。『享保六年書上』にはそのような事件は記されていない。しかし一増家には今も、ある時期切支丹であるために家が断絶した由の伝えが残されているらしい(『能楽』明治45年1月号「能の囃子方家系」)。

八郎右衛門は寛文四年(一六六四)に敵有院(徳川家綱)によって幕府お抱えとなる。延宝八年(一七三〇)九月十八日の綱吉將軍宣下の能の際、宝生大夫の東北を吹いているので(観世新九郎家蔵『將軍宣下能目録』、徳川五代將軍綱吉時代には宝生座付であった訳だが、寛文四年の時点で同時に宝生座付となったのかもしれない)。

『笛伝来中村家書留拔書』——解説と翻刻——

本書は、早稲田大学演劇博物館安田文庫所蔵(安田462)の一増家系図及び数種の文書の合写本である。280×202mm、墨付十一丁の仮綴半紙本で、題簽はなく、表紙中央に表題が書かれている。表・裏の表紙は共に反古紙を使用しているらしく、一増六郎左衛門に関する注記(一九五頁④⑤参照)の書きかけがある。裏表紙の見返しにある年記より、寛政二年(一七九〇)七月の写しであることが知られる。

左の六種類の文書が書写されている。

- 一、笛伝来(一増流系図)
- 二、萩原・中村・一増三家分流図
- 三、由緒書
- 四、土地の売買・物品の用立てに関するメモ
- 五、中村七十郎が幕府へ提出した、類族帳の写し(転切支丹に関するものもある)等
- 六、中村家先祖に関する覚え書

以下、主な文書に関して簡単な解説を加えたい。

「笛伝来」と「由緒書」は、相互補完関係にあるが、「由緒書」に存在する記事の大半は「笛伝来」にも記されており、本来同一のものから作られていると考えられる。「笛伝来」の方は、両書共通の内容を系図として体裁を整え、さらに幕府お抱えに関する記録その他を書き加えたものである。

「由緒書」は、『享保六年書上』提出者である又六郎(『一増流笛

秘伝書』には政史と署名されている。法名は噌善。演劇博物館蔵『順勝院噌善手記』によれば、院号は順勝院。以下噌善と称する）の手によってまとめられたものであるらしい。即ち一噌六郎左衛門を「祖父」と呼ぶのに相応する人物であるからである。又この「由緒書」は『享保六年書上』と極めて近い内容・表現を有しており、明らかに一方が他方を参照したものである。『享保六年書上』には矢野新五郎の法名が一字であることや、噌庵の嫡男噌具について等が欠落している点から考えて、幕府へ提出する正式の書上を作成する際の準備としてまとめられたものが「由緒書」であり、それを整理したのが『享保六年書上』であろう。

この「由緒書」は、元禄丁二年（二九〇）にまとめられたものを基にしているらしい。中村又三郎・新五郎の項には「元禄十二年迄何年」と注記されているのである。同年は噌善の父一有が荻原長兵衛の息子彦五郎を聶養子とすることを許可された年にあたる。その後一有には実子又八郎が誕生したために、彦五郎は義弟に一噌家の跡を譲る。彦五郎自身は宝永五年（二七〇）に士分に取り立てられ、旧姓荻原を名乗り、その実子は荻原家を相続している。噌善は又八郎の実弟であり、兄の跡を継いで、一噌家の家督を相続する。二の項にある荻原・一噌二家の系図が、以上のようなことがらを示しているが、『猿楽伝記』はそれを誤って次のように伝えている。

其子一噌八郎右衛門、後、宗古と云。第六郎右衛門を子と定。常憲院様御代、召出さるゝ故に、別に養子して、是を又六郎と云。後、病者と成、己が実方の内より養子して、家を譲る。是、当代の又八郎なり。

『申楽伝記』に記されている八郎右衛門の法名は宗光が正しく、子と定められたのは甥の六郎左衛門である。又六郎（一有）は八郎右衛門が別に立てた養子ではなく、六郎左衛門の養子である。彦五郎と又八郎を混同している。以上のような誤りが、二の系図より明らかとなる。

以下一・二の系図より判明する一噌家の歴史について略述する。幕府の扶持を食む笛役者となるのは一噌八郎右衛門の時代で、その時同時に一噌の苗字を正式に認められる。それ以前は備中屋中村七郎左衛門以来の中村を名乗っていたらしい。ところが、八郎右衛門の次の代の六郎左衛門は、元禄元年（二六〇）に士分に取り立てられ、旧姓の中村を名乗って七左衛門と改名する（後一遊）。一遊は先妻との間に男子なく、嶋田氏より養子（一有）を取って一噌家を相続させ、幕臣中村家は一遊の後妻の長男である七十郎（後七左衛門）が相続する。ここに、武家中村と笛の家一噌の二家が分立した訳である。能好きの綱吉が多数の能役者を自分専用の役者とすべく士分に取り立てていった時期、一噌家もその例外ではなかったのである。一の「笛伝来」では傍線部分に記されている如く、中村家系図が略されているが、それを補うものに『寛政重修諸家譜』（第二十冊三〇五頁）に収められている系図がある。『笛伝来中村家書留抜書』の内容と矛盾する部分は少なく、両者を比較すると両者の内容がかなり正確であることが推察される。なお『寛政重修諸家譜』には本名が記されており、一遊が矩政、七十郎が正容、一有が正方を名乗っていたことがわかる。また七十郎の没年が元文元年（二七六）十一月二十二日で、年は三十八歳、法名は噌真であること等も同時に記されている。

二の最後に大木家系図が記されている。大木吉兵衛は一噌流門人で、『万聞書』の「文照院御代ニ御役者ヨリ御時圭ノ間御番被召出候衆」の中に「一噌笛」としてその名が見えている。吉兵衛の長男の嫁が中村七十郎の姉であり、中村家と大木家が近い間柄であったことは事実であろうが、中村家系図が略され、かわりに大木家系図が掲載されている理由は不明である。

本書は抜書という性格上の制約はあるが、代々の人物に関する記録は詳細で、笛伝書の奥書や『寛政重修諸家譜』とも一致しており、概ね正確であると信じる。噌庵が所領を没収された理由が判明するだけでなく、現在までに紹介されている系図(『能楽全書』第二巻所収のもの等)の誤まりを訂正することができる。能好きで知られる將軍家綱・綱吉時代の能役者の家の実情の一端を示す好資料の一つであろう。

なお、翻刻に際しては、原本の形を生かすよう努めたが、次の点で、若干形を変更している。

一、「笛伝来」の系図の線は、関係が複雑で線がないと不明確な後半のみを残し、前半は省略した。

一、各記事は、句読点を付し、旧字体を新字体に改めた。明白な誤字についてはこれを適宜訂正した。

一、注記の位置は、可能な限り原本通りとしたが、一まとまりの記事は原本の改行に従わず、一括した。又行間注・割注が混在して煩雑な場合、後に別記したものもある。

本書の翻刻紹介にあたり、演劇博物館から御許可を得、資料調査に関して、同館並びに法政大学能楽研究所・東北大学図書館等の御便宜をたまわった。厚く御礼申し上げる。

中村家書留書抜

笛伝来

観世世阿弥時代之者之由申伝候

法名牛阿弥

牛大夫弟子長寸大夫子

チカイ弟子

又六子

又六弟子

太郎次郎子

左衛門子

左衛門弟子

彦兵衛弟子

七郎左衛門子

法名一噌

從は一噌流唱来申候

從秀吉公蟬折并高麗笛拝領仕候。山城之内地方三百石頂戴仕候由申伝来候。

玄祖父

一噌甥、父名不相知

矢野 新五郎
後改中村。法名一字

高祖父

一字子

中村 新五郎
法名噌庵
妻、妙安

噌庵代至、如何仕候哉、右所領被召上候付、数年御願申上候内、病死仕候。

曾祖父

噌庵嫡男
京都町人
中村 噌 具

妻、京都町人飯田道有娘

噌庵次男
從是一噌名字付來申候。法名宗光

八郎右衛門儀、敵有院樣御代寛文四辰年被召出、御配當米拾五石御扶持方五人扶持、拝領仕候。

祖父

八郎右衛門甥

一噌六郎左衛門(花押)

後妻、平田四郎兵衛娘③
先妻、沢西水娘④

六郎左衛門儀、常憲院樣御代元禄元辰年六月十四日、御廊下番被召出、御切米貳百俵被下置。同十丑年九月日不知御加増五十俵拝領仕。御奉公三十二年相勤、宝水六丑年二月二十二日、一同小普請入、大久保淡路守組入。享保二酉年十二月九日、願之通隠居被仰付。其砌奉願、一遊名相改申候。一遊後妻惣領中村七左衛門。跡略。

萩原・中村・一噌三家分流図

(番脱力)

未御役者相勤罷有候刻、聳養子仕候所、御廊下被召出候付、御役者跡式奉願、則聳又六郎相讓申候。

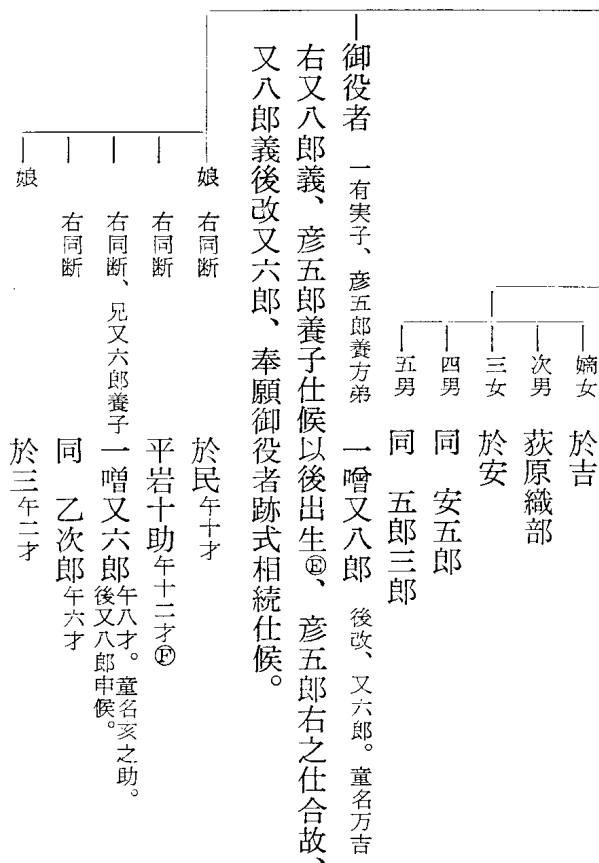
一噌六郎左衛門
妻 沢西水 娘

一女子一人聳、
上野国佐野領赤坂村、嶋田庄右衛門粹
一噌又六郎 法名二有

一女子於岸、聳一噌彦五郎実父、萩原長兵衛

右一噌又六義、男子無御座候付、彦五郎甥之続以聳養子仕度段、元禄十二卯年八月廿八日、加藤越中守殿奉願候処、願之

通養子被仰付年号月日不相知。未部屋住罷有候処、常憲院樣御代宝水五子年閏正月廿九日、御廊下番被召出、新規御切米百五十俵被下置之旨、加藤越中守殿於御宅被仰渡。其砌萩原彦五郎相改申候。同年二月十九日、御次番被仰付。宝水六丑年二月廿一日、於西丸秋元但馬守殿被仰渡、御次番一等小普請入、三枝撰津守組入。同年十月廿三、米津周防守組入。正徳元卯年八月十五日、松平主計頭組入。正徳五未年六月日不知日、朽木和泉守組入。享保二酉年二月日不知、中川伊勢守組入。享保六丑年廿日、嶋田彈正忠組入。享保八卯年二月日不知、酒井讃岐守組入。享保十五戌年二月十五日、内藤越前守組入。



父大木太郎兵衛惣領 大木吉兵衛

元藤堂和泉守方乱舞方相勤、後浪人仕御当地罷在。文照院様御代宝永三戌年六月十日、於西之丸御土圭之間御番被召出、御切米百五拾俵被下置。御奉公都合十一年相勤候所、有章院様御代正徳六申年五月十六日、於二九一等小普請入被仰付。小普請朽木和泉守組入。享保二酉年月日不相知、中川伊勢守組入。同六丑年五月日不相知、嶋田彈正忠組入。同八卯年二月日不相知、小普請酒井讃岐守組入。同十巳年七月二十八日、病死仕候。

跡目小普請駒木根肥後守組之節病死
同 吉五郎妻、中村七十郎姉 (花押)

同 六之助

嫡男 同 吉十郎(花押)父相果候年迄二十二才
次男 同 久次郎右同二十一才
別腹 百合、鷺森 於吉
又別腹 富之助右同九才
於千代満、由緒不相知

由緒書

父母由緒相知不申候

中村七郎左衛門

右七郎左衛門

中村又三郎

慶長五庚子年十二月廿四日。勝笛院
法名一噌。從一噌流唱來申候
元禄十二年迄百年

右一噌儀、從秀吉公蟬折并高麗笛頂戴。且山城之内地方三百石拝

領仕罷有候由。右笛共者、于今御役者一噌又六郎方、伝來所持仕候。

玄祖父

高祖父

実父母由緒相知不申候
養父一噌。実者伯父之名跡

矢野新五郎

右一字

中村新五郎

寛永十五、十一月廿七日
法名噌庵

元禄十二迄六十二年
妻、妙安
京都町人、西田惣兵衛娘

右噌庵儀、如何仕候哉、所領被召上候由。以後数年御願申上候内病死仕候。

曾祖父

右噌庵惣領

中村

慶安二乙丑年七月二日
法名噌具

妻、妙具日勝。八十一歳
京都町人、飯田道有娘

御役者

右同人次男

一噌八郎右衛門

元禄十六癸未年三月廿六日、心月院
法名宗光。從一噌名字仕候娘
本国山城町人、久保田与右衛門法名道閑娘

右八郎右衛門儀、敵有院様御代寛文四辰年月日不相知被召出、御配当米拾五石御扶持方五人扶持、被下置候。

祖父 御役者

養父一噌八郎右衛門
実者伯父之名跡
御取立被成下候

一噌六郎左衛門正房

後隠居仕、又一遊相改申候
元禄四辛未年四月七日
御役者以前先妻、常本院妙源日達幽儀
御役者、御廊下番春藤西水娘
御当地町人、平田四郎兵衛娘

下略

或反古。田村善左衛門持來甚兵衛屋鋪中、畑七畝六步之所、代金拾五兩買取、年号延宝二寅年十月廿日、無宛所、口入新堀村八郎兵衛・同名主平兵衛計。又或反古、右屋鋪守手形下書。新堀村家守七郎右衛門・請人八郎兵衛、天和二戌年二月二日、一噌市郎右衛門殿計。又其後之反古。同家守治兵衛・請人長兵衛、元禄八亥年二月二日、妙光樣計相見候。

同十六亥年七月十一日、表御祐筆被仰付之。

奉書向者、御祐筆飯高宇右衛門弟子被成被申候。初発者、奥御祐筆古橋忠次郎被致世話候。御役入之節、帷子・上下等、一噌又六郎用立被申候増全。

軫切支丹

一 妙安

右妙安義、京東洞院本竹田町、笛吹噌庵後家而候。切支丹宗門之由、年曆不知、撰津国大坂蒔屋半右衛門指候付、板倉周防守被遂僉義候処、寛水七午年、切支丹宗門軫、其上蒔屋半右衛門妻并喜平次下女玉、此人白狀仕候付、正保三戌年七月二十七日、右本竹田町江被預置。承応二巳年六月三日、七十七歳而病死。其刻、周防守檢使遣之、吟味之上、且那寺京小川日蓮宗妙顯寺塔頭実成坊而、死骸取置候由。父母并葬之品相知不申候。且又致白狀候喜平

治下女玉義、何国者候哉、相知不申候。

妙安(ママ)次男本人同前

一 笛吹新五郎

右新五郎義、切支丹宗門之由、從江戸京川原町通指物町三甫指候付、板倉周防守被遂僉義。正保二酉年二月十三日、揚屋江被入置候処、不分明付、同年二月十七日、京東洞院本竹田町江被預置。(ママ)慶安二丑年七月二日、七十七歳而病死。其刻、周防守檢使遣之、吟味之上、且那寺同所小川日蓮宗妙顯寺塔頭実成坊而、死骸取置申候由。葬之品相知不申候。

右類族

妙安孫本人同前、新五郎嫡男 日蓮宗江戸浅草妙縁寺旦那

一 中村一遊 前之名七左衛門 病死

右一遊義、江戸京橋南四町目罷在候処、貞享五辰年六月、被召出。享保四亥年九月廿七日、七十八歳而病死。右旦那寺而取置申候。

本人同前、新五郎嫡、中村一遊妻

一 銀 日蓮宗江戸浅草妙縁寺旦那 当巳五十歳

右銀、江戸山下町壳人、平田四郎兵衛娘

本人同前、新五郎孫、中村一遊嫡男

一 中村七十郎 宗旨・旦那寺右同断 当巳二十七歳

右拙者義、小普請建部民部少輔支配而、小石川御殿跡拝領屋鋪住

居仕罷在候。

本人同前、新五郎孫、中村一遊三男

一 中村彦太郎 宗旨・旦那寺右同断 当已二十歳
右彦太郎儀、拙者手前罷在候。

本人同前、新五郎孫、中村一遊娘

一 友 宗旨・旦那寺右断 病死

右友儀、拙者手前罷在、享保六丑年十一月十五日、二十五歳而病死。旦那寺浅草妙縁寺而取置申候。其節病死御届洩候付、此度書入申候。

本人同前、新五郎孫、中村一遊娘

一 国 宗旨・旦那寺右同断 病死

右国義、拙者手前罷在、享保八卯年二月十九日、二十一歳而病死、旦那寺浅草妙縁寺而取置申候。其節病死御届洩候付、此度書入申候。

右之通相違無御座候。今度直届罷成候間、帳面差出置申候。
以上

享保十乙巳年十二月

彦坂老岐守殿

建部志摩守殿

中村七十郎印判書判

類族帳面老冊請取申候。以上

彦坂老岐守内

已十二月廿二日

小野左伝次 判

中村七十郎様御内

古河安兵衛 判

小野善八殿

類族帳一冊請取申候。以上

建部志摩守内

已十二月廿二日

功刀幸左衛門判

中村七十郎様御内

平松源兵衛 判

小野善八殿

右帳面、建部民部少輔殿茂一冊差出之。

彦太郎九七病死之節者、御亡父御存命而候間、定而御届有之候様存候。不佞茂御亡父葬礼之刻、右大目付衆迄届入候儀、其節之組頭衆噂在之旨、岩田氏・東条氏被申聞、初而致承知之、右相届。其後送葬致執行候。其以前、又六郎上方申遣相濟候由。尤妙縁寺取置証文取之、上方者妙顯寺江遣候事之様相聞候。深香院殿之節者、相届不申候。延享二丑年五月廿一日、初而反古之中而此帳面見出記之候。

天文十一年壬寅八月二日、織田信長與今川義元戰于三州赤豆坂、
織田家英士七人

津田孫三郎信光

佐々隼人佐勝通

当家先祖之深光院。久成院共被申伝候

舎弟 孫介勝豊
織田造酒丞信房
中村又兵衛尉忠利
岡田助左衛門直教
下方弥三郎匡範

寛政二戌年

七月下旬

写之

(行間等の注記の類)

①、元禄四未年死。葬妙縁寺。「御役者春藤酉水娘。酉水妻死去由緒不相知。小舅女一人、手前引取置申候。」(「内は上部を梓で括ってある。②の傍線部同様、無用部分であることを示すか。表紙見返しに「内全部が、裏表紙見返しにその書きかけがある。」)

②、江戸町人。無用之所故抜。(「江戸町人」は平田四郎兵衛の注記。傍線部分を朱で囲む。表紙見返しにその書きかけ「四郎兵衛妻、江戸町人加藤市右衛門娘妙覚。宗旨西本願末」がある)
③、正徳四年三月十六日、小川町御用屋鋪相止候ニ付、小石川御殿跡而御屋鋪被下置之候。表口十式間三尺余、裏行拾九間五尺余、合二百五十坪。

同年六月廿七日、武州新堀村抱屋鋪弘申度、願差出候所、同年八月七日、願之通被仰付旨、久世大和守殿被仰渡候。

右願書 上包、奉願弘屋鋪覚 中村七左衛門

私抱屋鋪、新堀村三百四坪有之所、此度同所村百姓木工左衛門申者、調度旨申候付、弘申度奉存候。依之御願申上候。午六月二十七日 大久保淡路守殿。右者百姓地、表口十六間、裏行二十四間、奥留十五門、惣坪数三百六十坪之由、中畑七畝六歩之所、代金十五兩。買取年号延宝二寅年十月廿日。無宛所。入新堀村八郎兵衛・名主平兵衛計。

享保四亥年九月二十七日、病死。葬於妙縁寺。行年七十五歳。

久本院増源。(以上は一増六郎左衛門一遊に関する注記)

④、常憲院様御代、五拾俵御加増、并御屋鋪拝領仕候。神田松下町三丁目。年月日不相知。又六郎方相記置候哉。(横書)

⑤、江戸町人鈴木新右衛門娘ミノ。宗旨・寺共妙縁寺。(行間注)
⑥、尾張殿御役者、平岩嘉兵衛養子遣申候。其砌、芸術為執行、実兄又六郎手前差置候所、惣体平生不行跡、当亥月日不知出奔仕候。(平岩十助に関する注記)

⑦、理通院性養寂然信士 寛保元酉年五月十四日、行年四十四歳。駒木根肥後守組之節。(吉五郎に関する注記)

⑧、元禄八乙亥年十二月十八日 知円院 (妻に関する注記。十八日の横に「十七日ト外ニ者有」と注する)